

2017年度

とうきゅう環境財団
社会貢献学術賞贈呈式

第9回

日時：2017年11月20日（月）

会場：セルリアンタワー東急ホテル

公益財団法人とうきゅう環境財団
THE TOKYU FOUNDATION FOR BETTER ENVIRONMENT

ご 挨拶

2017年度 第9回「とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」贈呈式の開催にあたり、財団を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

とうきゅう環境財団は、東京急行電鉄株式会社の創立50周年を記念して、地域社会への感謝の気持ちに基づき、主要事業エリアを流れる多摩川およびその流域の環境改善・保全を図ることを目的に、1974年に設立されました。

2009年には、財団設立35周年の記念事業として、わが国の学術振興に資することを目的に「社会貢献学術賞」を制定し、贈呈事業を開始いたしました。

本賞は、日本の環境分野（環境保全、環境科学、環境技術など）において学術的、社会的に特に顕著な業績（調査、研究、環境科学技術の発展、行政施策への貢献、実践活動など）を挙げた個人、団体などの研究者を表彰するものであります。

今回は、当財団選考委員会における厳正な審査のもと、明治大学教授 倉本 宣様が受賞されました。

倉本 宣様は、近年その重要性が指摘されております「生物多様性」について、その保全と再生に関する基礎的研究を通じ、数多くの業績をあげられるとともに、その成果を社会に還元すべく、市民と一体となった活動に取り組み、環境保全分野において多大な貢献を行ってこられました。

特に、絶滅危惧種のカワラノギクの保全プロジェクトについては、多摩川を中心に各地の河川において市民活動の援助に携わられ、その手法は現在、全国の多くの河川で実施されております。

このほかにも、植物の遺伝子攪乱を防ぐための植栽方法の提案、生物多様性保全のための里山ボランティア活動の体系化をはじめ、数多くの自然保護活動に対して助言と支援にあたられ、市民環境科学の発展に大きく寄与されております。

このように、数多くの研究成果と活動実績をお持ちであり、高く評価されております倉本 宣様に、この社会貢献学術賞を贈呈することは、当財団にとりましても大きな喜びであります。誠にありがとうございます。

一昨年、国連で「持続可能な開発目標（SDGs）」が策定されました。この17の目標の中には、環境と密接にかかわるものが多数盛り込まれており、環境課題解決の必要性は、世界規模でますます強く意識されております。多摩川から始まった当財団の活動が、より大きな広がりとなり、世界を動かす力となるよう、今後とも努力してまいりたいと存じます。

本日、贈呈式にご臨席をいただきました皆様には変わらぬご指導、ご支援をお願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

公益財団法人とうきゅう環境財団
理事長 鈴木 克久

「第9回とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」 贈呈式

1 日 時 2017年11月20日(月)

2 場 所 セルリアンタワー東急ホテル
39階 タワーズサロン

3 式 次 第

• 贈 呈 式 「セレステ」午後2時～3時

(1) 挨拶 理事長 鈴木 克久

(2) 社会貢献学術賞授与 理事長 鈴木 克久

(3) 祝 辞 選考委員長 田畑 貞壽

(4) 受賞者ご挨拶と講演 倉本 宣 様
明治大学農学部 教授

• 懇 親 会 「ソレール」午後3時～4時

(1) 乾 杯 田畑 保 様
明治大学名誉教授
(元 明治大学農学部長)

☆ 会食・懇談 ☆

「とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」

受賞にあたって

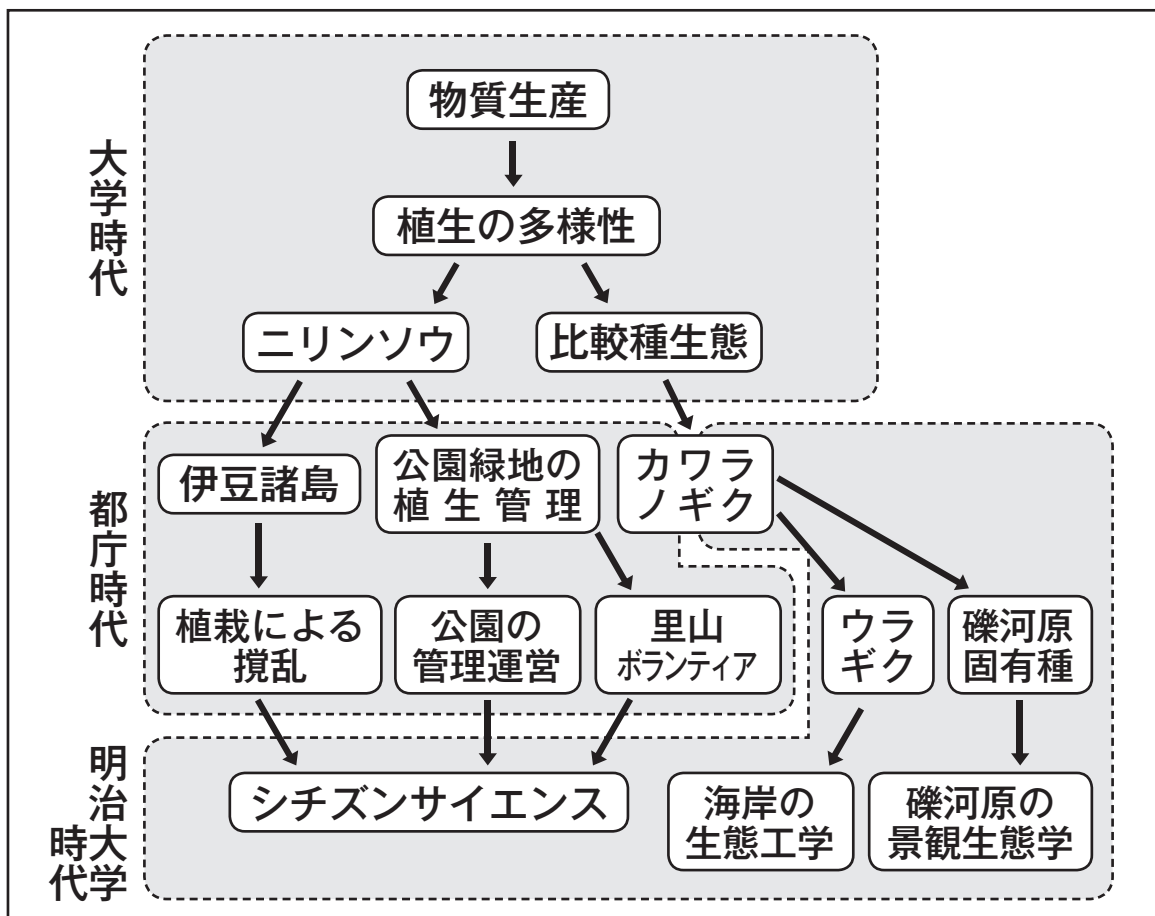


明治大学農学部 教授
倉本 宣

この度は、栄えあるとうきゅう環境財団社会貢献学術賞をいただくことになり、身に余る光栄です。心よりお礼申し上げます。とうきゅう環境財団が多摩川流域の環境問題に対する調査・研究に尽力されてきたことに、かねがね敬意を持って参りました。また、多くの研究助成や活動助成をいただき、私自身を研究者として市民として育てていただきました。これまでに受賞された先生方と比較して、若輩で学問的な貢献も少ないので、これから一層精進して、市民のための新しい科学を切り拓いていく所存です。

1. 基本的な立場

私の研究対象の変遷を図に表すと、このようになります。



私は、科学の世界に足を踏み入れて、44年になります。社会に対する大きな貢献ができたという自信はありませんが、いつも市民を意識して、市民と関係を持ちながら、主として多摩川流域で生きて研

究を続けてきました。

ここで、市民というのは主権者として「なすべきことをなす人々」のことです。都立国立高校生の時には、高校のある国立市の国立市公民館の社会人向けの講座を聞いて勉強しました。動物行動学の日高敏隆先生の講演もありました（「図書室月報」に記事を書かせていただきました）が、多くは社会科学の講座でした。この講座から、市民について、市民自治について学びました。その後、大学院生になってから強く意識したことが、市民のために研究を行うということでした。

私が考えた市民のための研究は、市民と一緒に、市民と関係を持って行い、市民に力を付けたり、市民の考えを豊かにしたりするもので、同時に私の研究も市民とかかわることで視野が広がったり、一人ではできないことができるようになりました。ただし、どんな市民にも評価されるとは限りません。私のことを理解してくださるのは、市民と行政の役割分担を意識している方が多いように思います。

2. 大学時代

私は、高校の生物の教科書に掲載されている層別刈り取り法を提唱したことで知られる門司昌三、佐伯敏郎両先生が所属していた物質生産の研究室の出身です。門司・佐伯の有名な物質生産の論文は1953年に印刷になったものです。私が大学院に進学したのは1979年ですから、この論文に由来する研究はほぼ終わっていて、指導教官の佐伯先生は物質生産にこだわらずにテーマを自由に選ばせて下さいました。私は日本ナチュラリスト協会という環境教育の活動で隔月に和泉多摩川をフィールドにして子どもが対象の自然観察会を開催していたことから、多摩川を中心に植生の多様性について研究することにしました。

1年生の時から全学一般教養ゼミナールで西村肇先生の指導の下、柏市の大堀川の遊水池の水質の24時間測定を行った経験も川に対する関心の源になったと思っています。私の遊水池の野鳥の記録が、西村先生と小川彰さんが書いたブルーバックスの『トイレットからの発想』に掲載されました。

修士課程1年次のときには研究室に私のほかに大学院生がいなかったので、佐伯先生とよく話しました。お話の内容の一部は今も私の行動規範になっています。佐伯先生はオリジナリティについていつも考えていました。もっともかんたんなオリジナリティは異なる分野を結び付けることで、もっともすぐれたオリジナリティは聞いた人がそんな簡単なことなら自分にもできると思うようなことだということでした。社会との関係については、自分の専門については社会的な責任があるというお考えでした。私は、社会と関係のある生物学を志して生態学研究室に進んだので、先生の見解については物足りなく思ったものでした。

博士課程では、多摩川の河原に生育するたくさんの植物の比較を行って多様性の成り立ちを調べる試みを行いました。この研究で後に日本造園学会で研究奨励賞をいただきました。一方、高島平ナチュラリストクラブを結成して、高島平団地周辺の公園緑地で子どもを対象とした自然観察会を始め、いたばし自然観察会と協働して、区の花ニリンソウを保存する会を結成して主として都立赤塚公園と都施工の板橋区四葉二丁目付近土地区画整理事業の用地におけるニリンソウの保全活動を行いました。ニリンソウの保全活動は佐伯先生から習った植物生態学の原理そのものでした。東京都北部公園緑地事務所工事課、板橋区公園課、板橋区緑の課、東京都都市計画局公園緑地計画課、赤塚公園管理所などと折衝することが実におもしろく、私たちのデータに基づいた主張が取り入れられたので、こんなおもしろい仕事があるならやってみたいと思って試験を受けて東京都庁に入都し造園学の道に進むことにしました。

3. 都庁時代

都庁の最初の職場は、伊豆大島の大島公園事務所でした。元町にある大島支庁土木課から車で25分

離れた最末端の事務所です。ここには太田周さんというすばらしい農園芸の職員がいて、さまざまなことを教えてもらいました。天然記念物の大島海浜植物群落に東京都が補植したトベラのようなすが在来の個体と違うので、もう二度と現場に行きたくないとおっしゃっていました。調べてみると、葉の幅と長さの関係などが異なっていました。このことを基にして、植栽によって本来そこに生育していない系統を持ち込んでしまう問題について、大場秀章先生、井上健先生に協力していただき、日本自然保護協会の機関誌「自然保護」に特集してもらいました。この研究は、考えてみれば当たり前のことですが、多くの社会的な活動や研究のきっかけになりました。そのため、東京都公園協会奨励賞、のちに日本緑化工学会賞技術賞をいただきました。この研究は佐伯先生の研究オリジナリティの区分に従えば、オリジナリティのある研究といえると自負しています。

大学院生の時の研究を造園学会の大会で発表しました。帰ってみると、当時信州大学の亀山 章先生(現東京大学農学博士、日本自然保護協会 理事長) から励ましのお手紙をいただいていた。その後、ずっと、生きものと共存する造園学を目指して、日本造園学会生態工学研究推進委員会を中心にいっしょに研究させていただいています。

大島には自然を守る勢力が当時は顕在化していなかったもので、大島在住の2人の先生といっしょに大島自然愛好会を結成し、緑の国勢調査、子どものキャンプ、自然観察会などを行いました。現在も、活動は続けられています。

次の職場は、環境保全局多摩環境保全事務所自然保護課、その次は東京都公園協会桜ヶ丘公園管理所でした。大島公園でも作っていたのですが、「今日はこれをみていこう」という公園などの季節の自然の見所紹介のチラシを作りました。公園緑地のファンを増やすために、公園緑地の見所をお知らせするものです。これは大学1年生の時に、大阪市立自然史博物館でもらった「今日はこれをみていこう」がもとになっています。

桜ヶ丘公園では都立公園で最初の「里山ボランティア」である「桜ヶ丘公園雑木林ボランティア」の活動を担当しました。大島の経験が役に立ちました。その前から、グループ「連」でボランティアについて考えてきたのですが、この機会にいろいろ考えることができました。福祉のまちづくりがテーマの東京都技術会議シンポジウムで、人と違って物言わぬ雑木林とどうかかわるかを発表して企画賞をいただきました。職員提案月間では「テーマパーク多摩丘陵」で佳作をいただきました。自然志向の造園職のネットワークを作るために「パークエコロジー研究会」を組織し毎月本庁で勉強会を開催しました。

研究としては、多摩川のカワラノギクの研究を、井上健、鷲谷いづみ、竹中明夫の各先生と開始し、シニアな研究者との共同研究として着々とデータを蓄積し、博士論文の執筆にとりかかりました。1989年に植物のレッドデータブックが刊行されました。カワラノギクの研究は絶滅危惧種の研究のモデルとして行いました。博士論文の審査をしてくださった井手久登先生からは、私の研究スタイルを「日曜の生態学者」と呼んでいただきました。府中四谷橋の架橋に当たり、アセスメントを担当した会社が、カワラノギクを識別できなかったため、保全策が講じられないまま工事が開始されました。多摩川の自然を守る会の柴田隆行さんと多摩川水系自然保護団体協議会の矢作隆信さんと協力して北多摩南部建設事務所に保全策を講じてもらいました。しかし、残念なことに出水の影響もあって府中市付近のカワラノギクは全滅しました。

そのあとは、大きな職場でした。東京都公園協会施設課、環境保全局自然保護部保全課です。同じ職種の人がたくさんいて、勉強会ができるのが楽しかった記憶があります。ここで、学位が取れ、明治大学に移ることになりました。造園職の集中配置案が出され、現場に造園職がいることが大事だと考えていた私たちは、「パークのパクちゃん」というミニコミ誌を出して造園職の職員の意識を高めることに努めました。環境保全局では、「自然はともだち」という冊子を毎年1冊職員が編集して発行していま

したので、都合4回作らせてもらいました。

4. 明治大学時代（現在まで）

明治大学に移ってからは、農学部農学科の緑地学という4名の教員のグループの一員となりました。日曜の生態学者には特別な器具はいらなかったのですが、学生の研究環境が整うまでに10年ほどかかったような気がします。最初の学年は17名で、まったく何の備品もなく、困惑した記憶があります。伊豆諸島をフィールドとしてカラスバト、スダジイ、サクユリ、国内外来種のヒキガエル、モリアオガエルの研究をする学生、横浜自然観察の森、新治市民の森などで公園の管理運営の研究をする学生、桜ヶ丘公園、舞岡公園などの里山ボランティアの研究をする学生、インターネットを使って野鳥の生態についてのシチズンサイエンスの研究をする学生たちといっしょに私はウラギクと海岸の生態工学および礫河原固有種（カワラノギク、カワラヨモギ、カワラサイコ、ヒロハノカワラサイコ、カワラニガナ、カワラバツタなど）と礫河原の景観生態学を行っています。カワラノギクの研究では日本造園学会賞論文賞をいただきました。

1997年からは河川生態学術研究会多摩川グループに入れていただいて、礫河原再生の大規模な実験に参加しました。その後、カワラノギクの再生のために、市民・行政・研究者の協働によって、カワラノギクプロジェクトとして、植生管理やモニタリングを行っています。

公園の管理の面では、ハトの餌やりと肥満については東京都公園協会最優秀賞を、雑木林の更新については東京都公園協会奨励賞を、指導した学生が受賞しています。シチズンサイエンスを生物多様性普及活動に応用することで、ちよだ生物多様性大賞をいただきました。ウラギクの研究をポスターにして葛西臨海公園に張り出す普及活動については東京都公園協会奨励賞をいただきました。

私は会員になったり先方のご厚意でご恵送いただいたりして約30か所の市民活動の会報を継続的に読ませていただき活動を把握し、市民活動の動向を把握するように努めてまいりました。我が国の市民が主体になっている生物多様性保全活動のなかで30か所というのはわずかですが、いつも心にかけている活動があることに意味をみいだしています。

一方、自分も科学者である前に一人の市民であるように意識して行動しています。ここで、市民というのはやはり「なすべきことをなす人々」という意味です。現実には多数の学生を一人で指導しなくてはならない私立大学の教員としては、労力の制約から大学の教員としてのふるまいをせざるを得ないこともありますが、まず自分も市民であることから出発するように心がけています。国立市の緑の基本計画策定の際には、緑の調査会を結成して市民が調査を行って計画の基礎を作りました。大学の近くの生田緑地では20年間あまり雑木林勉強会、植生管理協議会、自然会議、マネジメント会議の運営を担当してきました。雑木林勉強会は市民運動、そのほかの3つはその運動を受けて川崎市が設置した会議体です。立場の異なる市民の合意形成はむずかしいことも多く、無理に合意しないことも大切だと思うようになりました。

在外研究の際にロンドンの保全ボランティアの参与観察を半年間行ってみて、保全ボランティアは楽しいことがわかりました。大変な仕事の後のおしゃべりが楽しいのです。そこで、市民の活動を日本的に楽しくする方法をみいだしたいと考えています。

5. これから

私の研究室は、教員は私一人。学生は3年生、4年生、大学院で、年によって異なりますが、約20名です。学生の希望するテーマで研究を行ってもらっておりますので、私の専門分野の研究を行う学生は20名中5名ほどです。卒業と進学で学生が入れ替わると、それまでのテーマは消え、新たなテーマが始まり

ます。最近気づいたのは、私が学生一人当たりのテーマに費やすことができる時間は大目に計算しても当該学生の1/60程度だということです。そこで学生には研究のディスカッションができるように私にしっかり情報を提供するようと言っています。それが実現すれば、私の考え方を学生と共有することが可能になりそうです。

大学3年生の学生実習のときに電子顕微鏡用に、標本の切片を作る実習がありました。ガラスナイフというガラスを割ってできる鋭い断面を利用するものです。ガラスなので、すぐに切れなくなります。切れなくなったら再度割ってまた切れる面を作ります。私はガラスナイフのように生きていきたいと思っています。研究の世界の高みに登るのではなく、切れ味が悪くなってきたら自分を割りなおして、現場を歩き回りながら研究を続けていきたいのです。

【学術論文】

- 1 Variability of stream water quality in some land management systems in the Kakioka Basin, Japan 共著 Elsevier Agro-Ecosystem 7, pp.47-61 1981年
- 2 Stream water quality as influenced by land use patterns in the Kakioka Basin, Japan 共著 J.Environmental Quality10(2), pp.187-188 1981年
- 3 多摩川河川敷の植物群落の多様性に及ぼす河川敷利用の影響 単著 造園雑誌(日本造園学会)46(5),117-122頁 1983年
- 4 都市公園における春植物ニリンソウ保全のための基礎的研究 単著 造園雑誌 47(5),101-105頁 1984年
- 5 都市公園の自然に対する利用者の行動 単著 造園雑誌 47(3),171-175頁 1984年
- 6 多摩川河川敷植物群落の帯状分布とその人間活動による変化 単著 造園雑誌 47(5),257-262頁 1984年
- 7 多摩川における固有植物群落の保全と河川敷の利用 共著 造園雑誌 48(5),169-174頁 1985年
- 8 不忍池(藍染川)流域の土地利用の変遷についての研究 単著 造園雑誌 49(5),275-280頁 1986年
- 9 伊豆大島におけるオオシマツツジの保全 単著 人間と環境(日本環境学会)12(2),16-23頁 1986年
- 10 伊豆大島のフロラ特性とそれに対応した植栽手法 単著 応用植物社会学研究(応用植物社会学研究会)15,17-24頁 1986年
- 11 多摩川の河川敷植生の変化とその要因 単著 応用植物社会学研究 16,13-23頁 1987年
- 12 多摩川におけるカワラノギクの保全生物学的研究 共著 造園雑誌 55(5),199-204頁 1992年
- 13 多摩川中流の流水辺における河川敷植生構成種の分布特性についての研究 単著 造園雑誌 56(5),163-168頁 1993年
- 14 Factors controlling the recruitment of *Aster kantoensis*(Asteraceae).I.Breeding system and pollination system 共著 Plant Species Biology9,pp.133-136 1994年
- 15 多摩川におけるカワラノギクの種子期の動態 共著 造園雑誌 57(5),127-132頁 1994年
- 16 実生出現法によるコナラ林の埋土種子集団の研究及びその植生管理への応用 共著 ランドスケープ研究(日本造園学会)58(1),76-82頁 1994年
- 17 多摩川におけるカワラノギクの個体群の分断化とその保全における種子散布の役割 共著 ランドスケープ研究 58(5),113-116頁 1995年
- 18 多摩川におけるカワラノギクの保全生物学的研究 単著 緑地学研究 15,1-120, 1995年
- 19 多摩川におけるカワラノギクの生育地の特性についての研究 共著 ランドスケープ研究 59(5),93-96頁 1996年
- 20 Life history and demographic features of *Aster kantoensis*, an endangered local endemic of floodplains 共著 Biological Conservation 78, pp.345-352 1996年
- 21 カワラノギクの個体群構造と実生定着のセーフサイトに関する研究 共著 ランドスケープ研究 60(5),557-560頁 1997年
- 22 カワラノギクの保全生物学と保全実務 単著 保全生態学研究(保全生態学研究会)2(1)43-53頁 1997年

- 23 *Aster kantoensis* Kitam. Endangered floodplain endemic plant in Japan : its ability to form persistent soil seed banks 共著 Biological Conservation pp.67-72 1997年
- 24 多摩川河辺植生構成種の初期成長の一斉試験 単著 環境システム研究(土木学会)25,13-18頁 1997年
- 25 Identification of conservation measures to protect the Japanese endangered plant species, *Aster kantoensis* 共著 Ecological Research 13(2), pp.141-149 1998年
- 26 カワラノギクの局所個体群の大きさが訪花昆虫の訪花頻度に及ぼす影響とカワラノギクの保全手法 共著 環境システム研究 26,55-60頁 1998年
- 27 伊豆大島愛宕山へのスダジイ移植の検討のための遺伝子変異の解析 共著 ランドスケープ研究 62(5),533-538頁 1999年
- 28 多摩川における増水による種子散布と増水後の護岸植生についての研究 共著 ランドスケープ研究 63(5),527-530頁 2000年
- 29 多摩川におけるカワラサイコとヒロハノカワラサイコの分布と発芽の特性について 共著 日本緑化工学会誌 25(4),385-390頁 2000年
- 30 多摩川のカワラノギク保全のための緊急アピール 共著 保全生態学研究 5(2),191-196頁 2000年
- 31 多摩川における絶滅危惧植物カワラニガナの現状とその休眠・発芽特性 共著 ランドスケープ研究 64(5),583-588頁 2001年
- 32 河原での埋土種子集団形成に関するモデル植物を想定しての適用度評価シミュレーション 共著 日本緑化工学会誌 27,90-95頁 2001年
- 33 伊豆大島における準絶滅危惧種カラスバトの分布と生息環境との対応関係 共著 環境システム研究 29,92-96頁 2001年
- 34 多摩川における絶滅危惧植物カワラニガナの生育地特性 共著 環境システム研究 29,98-101頁 2001年
- 35 桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの活動と組織に対する意識 共著 ランドスケープ研究 65(5),455-460頁 2002年
- 36 絶滅危惧植物カンエンガヤツリの発芽特性 共著 ランドスケープ研究 65(5),553-556頁 2002年
- 37 都市近郊域における緑地の配置とホンドタヌキの救護情報の分布の関係について 共著 環境システム研究論文集 30,101-107頁 2002年
- 38 絶滅危惧種ミズキンバイの発芽特性および発芽後の初期生育 共著 環境情報科学・別冊,環境情報科学論文集(16),347-350, 2002年
- 39 灌漑期と非灌漑期の谷戸の水路における絶滅危惧種ホトケドジョウの生息環境 共著 ランドスケープ研究 66(5) 2003年
- 40 多摩丘陵におけるホンドタヌキの下層植生構造に対する環境選択性に関する研究 共著 環境システム研究論文集 32,335-342頁 2004年
- 41 多摩区におけるコウモリと住民との共存 共著 BINOS 11,57-64頁 2004年
- 42 都市域における野生哺乳類との共存と生息環境の創出に対する住民の意識 共著 日本造園学会 67(5),779-784頁 2004年
- 43 オオマツヨイグサ、メマツヨイグサおよびコマツヨイグサの種子発芽特性 共著 日本緑化工学会誌 30(1),3-8頁 2004年
- 44 水田および用水路が持つ絶滅危惧種メダカの生息環境としての機能 共著 環境情報科学論文集 18,421-426頁 2004年
- 45 都市住民の野生哺乳類に対する態度と生息環境の維持・管理に対する意向 共著 環境情報科学論文集 19,241-246頁 2005年
- 46 都市部ニュータウンにおける竹林の環境保全機能に対する住民の意識 共著 ランドスケープ研究 68(5),773-778頁 2005年
- 47 多摩川の復元個体群におけるカワラノギク(*Aster kantoensis* Kitam.)の種子散布についての研究 共

- 著 日本緑化工学会誌 31(1),63-68 頁 2005 年
- 48 多摩川におけるカワラバッタの分布状況と生息地間ネットワークに関する研究 共著 環境システム研究論文集 33,73-78 頁 2005 年
- 49 屋上に営巣したコアジサシの保全活動に関わる市民の意識 共著 環境システム研究論文集 33,133-138 頁 2005 年
- 50 雌雄両全性異株カワラナデシコの種子発芽特性 共著 日本緑化工学会誌 32(1),122-126 頁 2006 年
- 51 多摩川上流域の岩場に生育するユキヤナギの種子発芽特性 共著 ランドスケープ研究 70 (5),475-478 頁 2007 年
- 52 荒川河口干潟におけるトビハゼの HSI モデルの作成と異なる干潟における適応性の検討 共著 日本緑化工学会誌 33(1),134-139 頁 2007 年
- 53 圃場整備された谷戸に生息するホトケドジョウの生息環境に関する研究 共著 環境情報科学論文集 21,117-122 頁 2007 年
- 54 多摩川上流域の岩場におけるユキヤナギの生育地特性 共著 ランドスケープ研究 71(5),557-560 頁 2008 年
- 55 Decreasing process and conservation of floodplain species
共著 J. Disaster Research3(3), pp.206-215 2008 年
- 56 伊豆大島における固有種サクユリの分布に関する研究 共著 日本緑化工学会誌 34(1),75-80 頁 2008 年
- 57 多摩川における外来樹種キササゲの分布と種子発芽特性 共著 日本緑化工学会誌 34(1),69-74 頁 2008 年
- 58 多摩丘陵および関東山地における非飛翔性哺乳類の種組成に対する森林の孤立化の影響 共著 応用生態工学 11(1), 41-49 2008 年
- 59 市民・行政・研究者の協働による絶滅危惧種カワラノギク保全活動の取り組み：多摩川における保全の実践とその評価 共著 保全生態学研究 14(1),101-108 頁 2009 年
- 60 Habitat management of little terns in Japan's highly developed landscape
共著 Biological Conservation142(9),pp.1891-1896 2009 年
- 61 Size and age at sexual maturity of female *Rana porosa porosa* in valley bottoms in Machida City, Tokyo, Japan 共著 Current Herpetology28(2),pp.71-77 2009
- 62 多摩川中流域において剥離して流下する藻類由来の有機物負荷量の推定 共著 環境システム研究論文集 39, II 37-43 頁 2011 年
- 63 河岸の岩場に生育するユキヤナギの開花の経年変化 共著 環境システム論文集 39, II 57-62 頁 2011 年
- 64 Development of microsatellite markers in a riparian shrub, *Spiraea thunbergii*(Rosaceae).
共著 American Journal of Botany99(7),pp.e283-e285 2012 年
- 65 浦安市における野鳥のヤシ類の利用 共著 Binos 19, 7-11 頁 2012 年
- 66 葛西臨海公園鳥類園におけるシギ・チドリ類の渡来状況と来園者の意識から見た現状と課題 共著 Binos 19, 8-18 頁 2012 年
- 67 公園利用者のカメに対する動物観 共著 動物観研究 17, 29-32 頁 2012 年
- 68 多摩川中流域の早瀬における河床礫の移動と付着藻類量の関係 共著 土木学会論文集 G(環境) 69(6), II_275-II_281, 2013 年
- 69 Twitter で考える現代日本人の動物観 共著 動物観研究：ヒトと動物の関係学会誌(20),37-42 2015 年
- 70 小面積皆伐更新が行われてきた都立小宮公園における更新の現状 共著 関東森林研究 66 (2),277-280 頁 2015 年
- 71 春植物の地上部消失後の植生と光環境 共著 日本緑化工学会誌 42(1), 80-85, 2016 年
- 72 関東平野に越冬する猛禽類は水辺とその周囲環境をどの程度利用しているのか 共著 BINOS 23, 27-35, 2016 年

略 歴 書

2017年10月現在

くらもと のぼる
倉本 宣

明治大学農学部 教授

1955年6月10日生

■ 学歴・職歴

- 1979年 東京大学理学部生物学科(植物学専攻)卒業
- 1981年 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
- 1983年 東京大学大学院理学系研究科博士課程中退
- 1983年 東京都庁造園技術職
- 1994年 博士(農学)
- 1996年 明治大学専任講師
- 1999年 明治大学助教授
- 2004年 明治大学教授(現)
- 2015年 University College of London(UCL)客員講師(在外研究)

■ 活動歴

- 東京都港湾審議会委員
- 神奈川県自然環境保全審議会委員
- 川崎市環境審議会委員
- 川崎市文化財審議会委員
- 茅ヶ崎市みどり審議会委員
- 国立市まちづくり審議会委員
- 国立市環境審議会委員
- 生田緑地マネジメント会議会長
- 生田緑地自然会議会長
- 生田緑地植生管理協議会会長

■ 受賞歴

- 1997年 日本造園学会賞
- 2007年 日本緑化工学会賞技術賞

■ 所属学会

- British Ecological Society
- 日本造園学会
- 日本緑化工学会
- 日本環境学会
- 日本景観生態学会
- 日本環境教育学会
- 日本生態学会
- 日本湿地学会

■ 主要著書

- 1 緑の景観と植生管理 分担執筆 ソフトサイエンス社 1987年
- 2 雑木林の植生管理 分担執筆 ソフトサイエンス社 1996年
- 3 雑木林をつくる 共編著 百水社 1997年
- 4 エコパーク 共編著 ソフトサイエンス社 1998年
- 5 大島町史自然編 分担執筆 大島町 2000年
- 6 タンポポとカワラノギク 共著 岩波書店 2001年
- 7 里山の環境学 分担執筆 東京大学出版会 2001年
- 8 環境市民とまちづくり1.自然共生編 共編著 ぎょうせい 2002年
- 9 生態工学 分担執筆 朝倉書店 2002年
- 10 Satoyama 分担執筆 Springer 2003年
- 11 自然再生：生態工学的アプローチ 共編著 ソフトサイエンス社 2005年
- 12 生物多様性緑化ハンドブック 共編著 地人書館 2006年
- 13 パークマネジメント 分担執筆 学芸出版社 2011年
- 14 都市の森の自然保護 分担執筆 日本野鳥の会 2017年

推薦の言葉

選考委員長 田畑 貞壽

倉本宣先生、第9回とうきゅう環境財団社会貢献学術賞の受賞、誠におめでとうございます。

倉本宣先生の主要な業績は、1980年代から現在に至るまで、身近な生態系の変化を、基礎的な研究から応用的研究へと展開してこられたことにあります。

倉本先生は、東京大学理学部で植物学を学ばれたのち、東京都庁の造園技術職に進まれ、現在は明治大学で教鞭を執っていらっしゃいます。その中で先生は一貫して「市民のための科学」「市民と関係をもって、ともに実践する科学」を基本として活動してこられました。

先生の研究の中で特に有名なものは、多摩川等における絶滅危惧種カワラノギクの保全・再生であります。先生は市民、行政、研究者の協働によるカワラノギクプロジェクトを立上げ、植生管理やモニタリングなどに取り組みられました。この、カワラノギクプロジェクトに見られる手法は「シチズンサイエンス」と呼ばれ、研究者による専門的知識の活用、市民の研究への参画、成果の社会への還元等を通じて、科学の理念の普及や研究成果の実社会へのスムーズな応用につながるものとして、近年学界で特に注目されております。先生の取組みは、多くの関係学協会、団体からも評価されているところであります。

また、都庁職員時代、伊豆大島赴任時に経験された、人為的な植栽による固有種の遺伝子の攪乱問題の研究を端緒として、地域性種苗、苗木の移動範囲等の実務的研究への道を開くなど、学術的にも大きな功績を残されました。

このような先生の研究姿勢と実績は、まさに当財団の社会貢献学術賞を贈呈するにふさわしいもので、これからの学会の担い手として大いに期待するものであります。

多摩川流域から始まった地域の環境保全回復の手立てが国内外に発信できれば、誠に幸甚に存じます。改めてお祝い申し上げますとともに、先生の今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

■ 選考委員 ■



選考委員長

田畑 貞壽

公益財団法人日本自然保護協会 顧問
千葉大学 名誉教授



池田 駿介

東京工業大学 名誉教授
株式会社技術研究所
国土文化研究所 研究顧問



奥山 文弥

東京海洋大学 客員教授



小堀 洋美

東京都市大学 特別教授
一般社団法人 生物多様性アカデミー
代表理事



小宮 輝之

上野動物園 元園長



近藤 昭彦

千葉大学環境リモートセンシング
研究センター 教授



齋藤 潮

東京工業大学
環境・社会理工学院教授



鈴木 信夫

昭和女子大学 客員教授
千葉大学 名誉教授



土屋 十圀

前橋工科大学 名誉教授



寺西 俊一

帝京大学 経済学部教授
一橋大学 名誉教授

▶ 役員・評議員 ◀

(五十音順、敬称略)

- 【理事長】 鈴木 克久 東京急行電鉄株式会社 顧問
- 【理事】 石渡 恒夫 京浜急行電鉄株式会社 取締役会長
大須賀 頼彦 小田急電鉄株式会社 取締役相談役
加藤 奂 京王電鉄株式会社 取締役相談役
金指 潔 東急不動産ホールディングス株式会社 代表取締役会長
栗田 充治 亜細亜大学 学長
小長 啓一 東京急行電鉄株式会社 取締役
小沼 通二 東京都市大学 名誉教授
中村 良夫 東京工業大学 名誉教授
三木 千壽 東京都市大学 学長
涌井 史郎 東京都市大学 特別教授
- 【常務理事】 小野木 喜博 当財団 事務局長
- 【監事】 長田 忠千代 東京急行電鉄株式会社 常勤監査役
- 【評議員】 上野 孝 横浜商工会議所 会頭
海老原 大樹 東京都市大学 名誉教授
大井 明 公益財団法人とうきゅう留学生奨学財団 理事長
外川 満夫 株式会社東芝 営業統括部総合営業部長
田畑 貞壽 公益財団法人日本自然保護協会 顧問、千葉大学 名誉教授
巴 政雄 東京急行電鉄株式会社 代表取締役副社長執行役員
鳥井 信吾 サントリーホールディングス株式会社 代表取締役副会長
光 富真哉 株式会社日立製作所 鉄道ビジネスユニット マネージングダイレクタ
山田 長満 川崎商工会議所 会頭
渡邊 功 東京急行電鉄株式会社 取締役専務執行役員

とうきゅう環境財団について

1974年（昭和49年）一当時の多摩川は、高度経済成長に伴う急激な人口集中によって、水質汚染が深刻な問題となっていました。東京急行電鉄の五島 昇社長（当時）は、東急の事業地域の中心を流れる多摩川流域の環境浄化を図ることが企業としての重大な責務であると考え、多摩川の水質調査・研究者への研究費助成を行う「とうきゅう環境浄化財団」を設立しました。

その後、多摩川の水質は徐々に改善し、1980年代には、ほぼ以前の清流を取り戻しました。2010年、当財団は「とうきゅう環境財団」と改称し、水質浄化のみならず、多摩川流域の生物の生態、歴史文化も含めた調査研究を幅広く支援することとしました。以来、研究成果の集積と発信などを通じて、「自然環境との融和をめざした経営」を理念とする、東急グループの一員として活動を続けています。

概要

設立 1974年8月28日

公益財団法人移行日 2010年10月1日

主務官庁 内閣府

基本財産

9億7千5百万円（2017年3月現在）

公益財団法人 とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷 1-16-14 渋谷地下鉄ビル 5 階

TEL 03-3400-9142

FAX 03-3400-9141

<http://www.tokyuev.or.jp/>